

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.30
WINTER 2013

日本総図

目次

●メッセージ

国文学研究資料館への期待…………… 小島 孝之 1

●研究ノート

権力と出版—『帝鑑図説』から見えてくること— …… 入口 敦志 2

松代八田家文書の世界—『史料目録』94集を刊行して— …… 西村慎太郎 5

明恵の和歌・夢・画—真贋のあわい— …… 平野 多恵 7

●トピックス

第36回国際日本文学研究集会 …… 陳 捷 9

イタリアとの日本文学国際共同研究集会 …… 海野 圭介 10

EAJRS(日本資料専門家欧州協会)研究集会 2012ベルリン …… 田中 梓 11

平成24年度国文学研究資料館「古典の日」講演会 …… 小林 健二 12

平成24年度サテライト講座 …… 野網摩利子 12

連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」 …… 入口 敦志 13

人間文化研究機構連携展示「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産—」 …… 太田 尚宏 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 …… 14

国文学研究資料館への期待

小島 孝之 (国文学研究資料館運営会議委員・成城大学文芸学部教授)

今、私の手許に『訪書の旅 集書の旅』と題する小冊子がある。財団法人日本古典文学会の会報百号を記念して、そこに連載された訪書、集書に関わるエッセイなどをまとめたものである。一応定価が付いているから非売品というわけではなかったのだが、おそらくこれを手許に持っている人も多くはないであろう。昭和六十三年四月一日の刊行であるから、すでに二十四年前である。その執筆者を見ると、久松潜一氏を筆頭に、麻生磯次、市古貞次、山岸徳平、横山重、野間光辰、松田武夫・・・と二十二名の大先達の名前が並んでいる。今はそのほとんどの人々が鬼籍に入られている。こうした大先輩の訪書・集書は大正時代から昭和初期に始まり、昭和四十年代までに至る。そこに語られている書物を見るための苦労は驚くべきものがある。おそらく今の若い研究者たちには想像も及ばないのではなからうか。中から山岸徳平先生の思い出の一部を引用してみよう。

それは、大正十四年八月下旬であった。私は、徳島市の県立光慶図書館に、旧阿波国文庫本を探訪のため出張した。その帰途、本門寺を訪問したのは八月二十九日頃で、大宮市、すなわち今の富士宮市からガタ馬車に乗って、三十分程で本門寺の近くの停留所に来て下車した。杉の大樹に囲まれている大きな寺が本門寺だと、すぐにわかった。案内を請うと、老人に近い程度の寺男が出て来た。私は、来意を告げて名刺を出した。寺男は奥に行った。やがて寺男は戻って来て、うやうやしく言った。「上人様はちょっと風邪気味で引きこもり中でございまして、『切角のおいでなのに恐縮ながら、御趣意に添いかねる次第』との仰せで・・・『改めて後日に』と『よろしく申し上げよ』との事でございます。お気の毒に存じますが」と体よくことわられた。

バスでなく「ガタ馬車」というのも時代を感じさせるが、時間をかけて行っても空振りということはよくあったようだ。

私が研究の道に足を踏み入れたのは今から四十数年前だから、ちょうどこの本に収められた大先達の次の時代ということになる。先学の時代に比べれば、交通網も整備され、図書館、文庫の整備も進んでいたから、ずいぶん楽になっていたのだと思う。それでも、東海道新幹線も開業したばかりで利用できる区間は限られており、高速道路網などまだ存在しなかった。複写機などもほとんど普及していなかったから、写本、板本の調査には多大な労力と費用が必要だった。貧しい学生

の身にはかなり辛いものであった。

国文学研究資料館の必要性を訴え、その実現に身を挺して邁進した先達は、まさにこの小冊子の旅を書き記した人々と重なるのである。自らの調査の困難な体験と実感、そして大正大震災、第二次世界大戦の戦火で焼失した多くの古典資料に思いを致して、貴重な典籍の複写記録を後世に残し、研究を志す人が誰でもそれを見ることができるようになるといことが、日本の文化にとっていかに大切であるかを思い、実現しようと努めた結果として、ついに国文学研究資料館が国の機関として産声を上げたのであった。

同じ小冊子から、野間光辰先生の文章を引用しよう。

紫影先生手沢の写本に、『帳中香』と題する一冊がある。大正の初年頃、藤村作、石田元季両先生と三者地を隔てて住みながら、互に入手した珍書を交換して写し留められたものであった。卒業論文を書く段となって、西鶴関係の俳書を捜し求めたが、今と違って『国書総目録』の如き便利な所在目録はない。捜しあぐねて一日頼原先生をお訪ねしたらば、「ウン僕が写してるよ」と東京大学の洒竹文庫の写しを貸し与へられた。見れば四百字詰の原稿用紙に、前半は頼原先生、後半は能勢朝次先生の手で写してある。恐らく時間を惜しんでお互いに分担書写、後に交換せられたのであらう。

複写機のない時代の苦労のほどがうかがえる文章であろう。

国文学研究資料館は開館から、はや四十年を超え、半世紀に及ぼうとしている。場所も戸越から立川へ移転し、組織も何度かの改革を経て、現在に至っている。時代とともに、館に求められるものも変化し、それらに合わせて組織、機構も変わって来た。しかし、どのように変わろうとも、根幹は変わらないはずである。貴重な古典籍を網羅的に記録し、後世に残すこと。そしてその資料を必要とするすべての人に利用できるように公開すること。それが発足を推し進めた大先輩たちの共通して抱いた願いだったと思う。

この小冊子を発行した財団法人日本古典文学会はすでに解散したが、その遺産は国文学研究資料館賛助会に吸収されている。これも縁なきことではなかったのである。

国文学研究資料館には幾多の苦労を重ねた大先輩達の思いが詰まっている。この初志を忘れず、すべての研究者のために、新しい時代を切り開いて行ってほしいと願ってやまない。

権力と出版 —『帝鑑図説』から見えてくること—

入口 敦志 (国文学研究資料館助教)

『帝鑑図説』という書物がある。幼くして即位した中国明王朝第十四代皇帝、神宗万暦帝の帝王学の教科書として作られた書物である。帝王学の書とはいえ、子供向けであるため全117話に挿絵があり、本文も短く簡潔で、最初の刊行直後から多くの模倣出版が行われ、現在に到っている。その出版の様子をみてみると、権力が出版という行為にどう関わってきたかを示す事例に多くあたる。そこで、本稿では、『帝鑑図説』の出版をとおして見えてくる、権力と出版との関わり的一端について考察してみたい。

一、最初の『帝鑑図説』、明・万暦期

- 1568 明・隆慶二年、後の万暦帝六歳で立太子。
- 1572 明・隆慶六年、隆慶帝崩御し、万暦帝十歳で即位。
- 1572 明・隆慶六年十二月十八日、『帝鑑図説』張居正・呂調陽、進図疏。
- 1573 明・万暦元年、『帝鑑図説』陸樹声叙(二月)、王希烈後序(四月)。
- 1573 明・万暦元年、『帝鑑図説』殿版刊か。
この頃、張居正『帝鑑直解』成、明代写本。未見。
- 1575 明・万暦三年、『帝鑑図説』郭庭梧版刊、有図。叙・進図疏あり。
明・万暦頃、万暦版刊。絵に埋木による修正あり。叙・進図疏あり。
明・万暦頃、天理本刊。叙・進図疏あり。朝鮮本風に改装されている。五つ目綴じ。
明・万暦頃、伊達文庫本刊。進図疏のみ。
- 1582 明・万暦十年六月、張居正没。没する直前に万暦帝より「大師」の称号を贈られる。
- 1583 明・万暦十一年、張居正官位剥奪され、一族も追放される。
- 1604 明・万暦三十二年、『帝鑑図説』金濂版刊、六冊、有図。進図疏なし。
- 1612 明・万暦四十年、『新板全補天下使用文林妙錦万宝全書』刊。
卷三人紀門の歷朝通紀に『帝鑑図説』を一部引用する。
- 1622 明・天啓二年八月、『帝鑑図説』天啓版刊、六冊。
天啓帝により張居正の名誉回復。ただし、『帝鑑図説』の進図疏は復活していない。
- 1644 清、入関し北京を首都とする。
これ以前に満洲語訳『帝鑑図説』が作成されていたという(櫻井俊郎)。
- 1819 清・嘉慶二十四年、『帝鑑図説』張亦縉等純忠堂無図版

刊、二冊、無図。

この頃、清刻本『帝鑑図説』純忠堂有図版刊、五冊、有図。

この頃、清刻本『帝鑑図説』鄧氏版刊。

- 1851 清・同治年間、宮廷にて『帝鑑図説』画帖作成される。
宮廷画家沈振麟画、潘祖蔭等書。台湾故宮博物院蔵。
善話のみ五十六話採録し、二帖に仕立てる。図は、清版の挿図に基づいて書き起こされたもの。同種のもの他にもあり。

最初の『帝鑑図説』が、十歳で即位した万暦帝に対する帝王学の書として構想されたことは間違いない。しかし、万暦帝一人に対する教育という実用的な面から考えてみると、一冊の写本があればこと足りるはずである。それをすぐに出版して広めようとしたことには、万暦帝を帝王として育てるといふ宣言であるとともに、『帝鑑図説』の成立に関わった、つまり万暦帝の傳育に関わった呂調陽や張居正らが、今後政治的主導権を発揮するのだといった宣言という意味合いもあっただろう。つまり、この出版にはそういう政治的な意味が込められていたと考えられるのである。実際、万暦初年は張居正が政治の中心となり、逼迫した財政状況であった明廷の経済状況を、僅か十年足らずのうちに大幅な黒字に転じたことはよく知られている。万暦初期に刊行された各種『帝鑑図説』は、官版だけでなく坊刻版と思われるものも多く、また版種も多岐にわたるが、張居正らの威光にあやかるうとした面もあると考えてよいだろう。末流の刊本と思われる粗略なつくりの伊達文庫本が、陸樹声の叙は省略しても、張居正の進図疏だけは残していることから、そのことはうかがえるのではないかと。

明版の『帝鑑図説』の中には、張居正の進図疏を持たない刊本がある。万暦十年(1582)張居正が急逝する。万暦帝は張居正の死の直前に「大師」の称号を贈った。これは「文臣中の最高官位であり、明朝二百年の歴史の中で、生前にこの榮譽を得たものはなかった」(黄仁宇『万暦十五年』)というほどの厚遇であった。万暦帝は最高の榮譽をもって張居正を称えたことになる。ところが、翌万暦十一年(1583)になると事態は一変する。張居正が生前、父の喪に服さなかったこと、すなわち「奪情」が問題となり、官位や名譽を剥奪されるとともに、財産は没収され一族は追放されてしまうのである。おそらく、これ以後張居正の進図疏を付した『帝鑑図説』は刊行することが出来なくなったと考えるべきであろう。現に万暦三十二年(1604)に刊行された金濂版には張居正の進図疏はない。天啓元年(1621)には名譽が回復されたのだが、その翌年に刊行された天啓版でも、張居正の進図疏は復活することにはなかった。その疏が復活するのは、王朝が清朝に交代した後、嘉慶頃(1796～)に刊行された純忠堂版からである。この版では、

見返しの著者名に「江陵張文忠公諱」と、追贈されてすぐに剥奪された諡「文忠」を使用するなど、むしろ張居正を顕彰する意図があるように推測される。

二、家康の出版事業と秀頼版『帝鑑図説』の刊行

- 1598 慶長三年八月十八日、豊臣秀吉没、この時秀頼六歳。
- 1599 慶長四年五月、徳川家康、伏見版『孔子家語』『六韜』『三略』刊。
- 1600 慶長五年二月、家康、伏見版『貞観政要』刊。
慶長五年三月、家康、伏見版『六韜』『三略』再刊。
慶長五年九月、関ヶ原の戦い。
- 1603 慶長八年二月十二日、家康、伏見城にて將軍宣下。
- 1604 慶長九年、家康、伏見版『六韜』『三略』再再刊。
- 1605 慶長十年三月、家康、伏見版『吾妻鏡』刊。四月、伏見版『周易』刊。
慶長十年四月十六日、秀忠、伏見城にて將軍宣下。
- 1606 慶長十一年、家康、伏見版『武経七書』刊。
慶長十一年三月、『帝鑑図説』秀頼版刊。六冊、有図。
本文古活字、図整版。この時秀頼十四歳。西笑承兌の跋あり。
- 1615 慶長二十年五月八日、大坂夏の陣にて秀頼没、二十三歳。
- 1615 元和元年、家康、駿河版『大蔵一覽集』刊。
- 1616 元和二年二月、家康、駿河版『群書治要』刊。
元和二年四月十七日、家康、駿府城にて没。七十五歳。

さて、我国においては、徳川家康が『六韜』『三略』などの軍学書や『貞観政要』などの政治学の書物を次々に刊行する。いわゆる「伏見版」「駿河版」と呼ばれる古活字本である。慶長三年（1598）に豊臣秀吉が没した直後のことで、あたかも政治を家康が司ることを宣言するかのような出版活動であると言ってよいだろう。家康の出版活動は一時的なものではなく、駿府に退隠した後も『群書治要』を刊行するなど持続的なものであった。同じ書目を繰り返し出版していることから見ても、家康がそれらの書物を単に好んでいたという理由だけでないことは間違いない。周囲の人々にそれ等の書物を薦めるとともに、出版を通して政治を担うことを誇示していたと考えられよう。

一方の豊臣氏は、秀吉は出版活動に全く手を染めていない。秀頼の時代になって唯一出版されたのが、本書でとりあげた『帝鑑図説』であった。秀吉が没したとき秀頼はわずか六歳。『帝鑑図説』を刊行した慶長十一年（1606）でもまだ十四歳という年齢。秀頼は幼くして即位した万暦帝と同じ境遇に置かれていたと言ってよい。秀頼がこの書を好んだということであるが、出版という行為には、家康の政治的な出版事業に対抗するとともに、為政者として秀頼を立てていくのだということを表明する秀頼周囲の人々の思惑も大いにあったと考えるべきであろう。万暦帝の時と同様、ここでも『帝鑑図説』は政治的な使命をもって刊行さ

れたと言える。

注目すべきは、秀頼版には西笑承兌の跋をもつものがあることである。承兌は家康による伏見版の出版にも関わっていた人物。その人物が秀頼版の出版にも関わっていたと言うことになる。秀頼版には承兌の跋を持たないものあり、家康の忌諱に触れて跋を省いたのだという説もある。伏見版の刊行が、秀頼版の刊行された慶長十一年（1606）の『武経七書』を最後に途絶えていることは、承兌の跋の問題と絡めて今後検討する必要があるだろう。

帝鑑図という画題によっても、権力はその力を誇示する。朝廷における「賢聖屏風」などに匹敵するようなかたちで、武家は帝鑑図を格式に織り込んでいった。寛永行幸の際の二条城の御幸御殿や名古屋城の上洛殿、江戸城本丸帝鑑之間など、権力を荘厳するために多用されていったことは、多く残されている障屏画によって明らかである。近世初期には、主に刊行と絵画化といった営為によって、『帝鑑図説』は広く受容されていく。

三、和訳本『帝鑑図説』刊行

- 1627 寛永四年十一月、『帝鑑図説』和訳本、八尾助左衛門尉刊、十二冊、有図、本文無梓。
平仮名漢字混じりの和訳本。張居正の進図疏のみ和訳する。
- 1634 寛永十一年、名古屋城本丸御殿に、狩野探幽により帝鑑図が描かれる。
- 1650 慶安三年三月、『帝鑑図説』和訳本、八尾助左衛門尉刊、十二冊、有図、本文有梓。
- 1651 慶安四年四月、徳川家光没。家綱、十一歳で將軍となる。
- 1654 承応三年、池田光政、諫箱設置。
寛永末年以後、万治以前、岡山藩主池田光政、久世広之他『帝鑑評』成。写本。『帝鑑図説』の三十五話について、その評を記したもの。
- 1668 寛文八年、池田光政、老中酒井忠清の専権に対して建白書を提出。
- 1709 宝永六年五月、『帝鑑図説』和訳本、須原屋茂兵衛刊、十二冊、有図、本文有梓。承応版の求板本。無刊記本あり。

その後、寛永・慶安・宝永と三度にわたって和訳本『帝鑑図説』が刊行されることにより、内容もより一層広まっていく。池田光政らによる『帝鑑評』では、『帝鑑図説』の読まれ方の一端がよくわかる。そこでは為政者の心得という帝王学としての正しい読みがなされている。また光政は、目安の箱（諫箱）の設置や幕府への建白書の提出など、『帝鑑図説』にとりあげられた善政の典型を具現したような政策や行動をとっていることも注目されよう。

一方、『帝鑑評』では、皇帝のすべての行動原理が「仁」という徳目で読み解かれていることも特徴としてあげられる（拙稿『帝鑑図説』の読まれ方）。これは、中国における読み方とは違った面であると思われる。原文を読む限り、すべて具体的な対処法や

政策など、現実的なものであって、帝王の徳目に依拠するような話しはない。つまり、日本においては、政治を技術論としてみるのではなく、仁などといった徳目によって自ずと治まることを理想とする徳治主義的な傾向が強いと言えそうである。

そして、我国においても一度刊行されるのが、幕末の安政五年（1858）である。幕府官版としての刊行であるが、官版で挿入りの本を刊行することは珍しい。これもなんらかの意図があつたのことで考えられる。

四、幕府官版『帝鑑図説』刊行と將軍継承問題

- 1857 安政四年、この頃、將軍家定の病状悪化により継嗣問題が起こる。
一橋派、一橋慶喜（二十一歳）：島津斉彬、松平慶永、徳川斉昭、阿部正弘など。
紀州派、徳川慶福（十二歳）：多くの譜代大名、大奥。
安政四年六月十七日、阿部正弘急死。
- 1858 安政五年四月、井伊直弼、大老就任。
安政五年五月、『官版 帝鑑図説』幕府官版、出雲寺万次郎刊、六冊、有図。
安政五年六月、日米修好通商条約締結。
安政五年六月、紀州徳川慶福を家定の継嗣と定める。
安政五年七月、徳川家定没。慶福、家茂と改名し、十三歳で將軍となる。
安政五年九月、安政の大獄はじまる。
- 1880 清・光緒六年、『帝鑑図説』光緒版、申報館申昌書画室発行、石版、小本、四冊。
図は安政版を利用（河野元昭）。この年、光緒帝十歳。即位して五年目。
明治年間、『官版 帝鑑図説』（内務省）後印本（河野元昭）。

安政四年（1858）、十二代將軍徳川家定の病状悪化により將軍継嗣問題が起こる。一橋慶喜と徳川慶福、いずれを次期將軍にするか、また、開国すべきかどうかということで、国内に大きな混乱が起きるのである。そのような混乱の中でわざわざ『帝鑑図説』を出版したことには、それなりの意味があると考えらるべきであろう。直接そのことを証言する資料は現時点では見いだせない。しかし、この年十三歳になったばかりの幼い慶福を、將軍継嗣として傅育し盛りたててゆくのだという幕閣の決意が込められていたのではなかったかと臆断する。英明であると評価されていた二十一歳になる慶喜のために、図入りの本を刊行したとは考えられまい。慶喜を推していた阿部正弘急死のあとを受け、井伊直弼が大老就任して以降の計画刊行ではなかったか。状況から推察すれば、ここでも、万暦帝や秀頼の時と同じ政治的意味を込めて、『帝鑑図説』の刊行が行われたとすべきであろう。

この安政版は、河野元昭氏の指摘にもおとり、海を渡り、上海申報館において、光緒六年（1880）、模倣縮小されて石版で印

刷される。イギリス人商人アーネスト・メイジャーが経営していた申報館は、『点石齋画報』という絵入新聞を出版していたことで良く知られている。三歳で即位した光緒帝は、この年でもまだ九歳。殿版でもないのに、直接清朝宮廷との関わりはないと思われるが、商人としてのなんらかの当て込みはあったかもしれない。

その後、王朝が崩壊した中国では『帝鑑図説』は忘れ去られてしまうが、1992年、改革開放政策が再開されると、再び脚光を浴びようになる。

1994年、社会科学出版社による『帝鑑図説』が現代中国における出版の嚆矢。これは、本文と板本の図を入れたもの。1996年の『帝鑑図説標註』は、詳細な注と評、そして清版を基にした新たな図を入れたもので、これがその後の出版に大きな影響を与えたと考えられる。中国では現在にいたるまで、ほぼ一年に一冊の頻度で『帝鑑図説』が刊行されており、かなりの需要があるようである。筆者も十数冊入手した。中国の書店では「勵志読物」や「少年読物」に分類配架して販売している場合もあるが、一方で図を省いてしまって文章だけとし、大人向けに仕立てられた本もあり、その多様な受容の様態が推し量られよう。この刊行の隆盛も、改革開放政策と軌を一にしていると思われ、現代においても政治状況と密接に関わったかたちで刊行されていることがわかる。また、韓国においても、2008年と2011年にそれぞれ『帝鑑図説』が刊行されている。特に2011年刊行のものは、中国で刊行された『帝鑑図説標註』に多くを負っており、中国での出版の盛況に刺激されてのものであることがうかがわれる。

このように、『帝鑑図説』の刊行に関わる時代状況をみても、この書物が政治的な意図をもって刊行され受容されてきたことがよくわかるのである。

【参考文献】

- 川瀬一馬『増補古活字版の研究』（日本古書籍商協会、1967年）
黄仁宇『万曆十五年 1587文明の悲劇』（稲畑耕一郎・岡崎由美・古屋明弘・堀誠訳、1989年8月、東方書店）
櫛笥節男『書庫涉獵一書写と装訂』（2006年2月、おうふう）
河野元昭「探幽と名古屋城寛永度造営御殿 中」『美術史論叢』四号（1988年）
榊原悟『帝鑑図』小解『近世日本絵画と画譜・絵手本展』Ⅱ（1990年4月）
櫻井俊郎「万曆初政の経筵日講と『歴代帝鑑図説』」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』第49巻（2001年3月）
太田昌子「服属儀礼と城郭の障壁画」『日本の時代史13天下統一と朝鮮侵略』（2003年3月、吉川弘文館）
松嶋雅人「狩野派の帝鑑図」『イメージとテキスト—美術史を学ぶための13章』（2007年4月、株式会社ブリュッケ）
松島仁『帝鑑図説』と徳川將軍の〈中華〉『風俗絵画の文化学Ⅱ虚実をうつす機知』（2012年3月、思文閣出版）
入口敦志「模倣と変容—『帝鑑図説』受容発端—」『江戸文学』第38号（2008年6月、ペリかん社）
入口敦志『帝鑑図説』の読まれかた—『帝鑑評』を中心に—『成城文藝』第209号（2009年12月）

松代八田家文書の世界 —『史料目録』94集を刊行して—

西村 慎太郎 (国文学研究資料館准教授)



文化10年八田嘉右衛門「書籍目録」

国文学研究資料館ではその前たる国立史料館が1952年に『史料館所蔵史料目録』第1集を刊行して以来、毎年2冊程度の館蔵歴史文書の目録を刊行している。その目録の第94集として『信濃国埴科郡松代伊勢町八田家文書目録(その4)』(以下、『八田家目録(その4)』と略す)を2012年春に刊行した。八田家の目録はこれまで3冊刊行(第41・48・50集)し、第94集と合わせて12565点の文書が収められている。但し、佃家文書はたいへん膨大な点数に及んでいるため、現在も整理作業と目録作りは続けられている。2012年度末には第96・97集として2冊の八田家目録を刊行する予定である。

本稿では筆者がたずさわりの階層構造を明らかにした『八田家目録(その4)』を作成する過程で知り得た八田家の文芸活動の一端を紹介するものである。なお、本稿は2012年10月9日の国文研フォーラムで報告した内容に基づいているが、目録作成の過程や文書群の全体像などについては『八田家目録(その4)』で述べたため、ここでは八田家の概略を提示した上で、八田家における蔵書の位相と蔵書目録について紹介することとしたい。なお、北信濃地域の文芸活動については当館アーカイブズ研究系編『近世・近代の地主経営と社会文化環境』(名著出版、2008年)で、長野県最大の地主であった地方名望家・山田家を事例として杉仁・山田正子・山田哲好・藤實久美子

氏が詳細に論じている。

最初に八田家の歴史について見てみたい。八田家はもともと甲斐武田遺臣と言われ、松代に居住して呉服商い・酒造業を始めたようである(木町八田家)。館蔵八田家文書の八田家は木町八田家3代目当主長左衛門の次男であり、孫左衛門と称した人物が分家したことにはじまる。孫左衛門は宝永4年(1707)6月に本家から分かれ、同6年6月より松代城下の伊勢町に居を構えた(伊勢町八田家)。同時に町年寄にも就任している。2代目当主嘉助は初代孫左衛門の弟に当たり、兄の養子となった。寛保3年(1743)7月に町年寄に就任し、初代孫左衛門の死後、孫左衛門同様に藩より30人扶持が給されている。さらに、同年12月1日には御用金の切り捨てにより20人扶持が加増され、合計50人扶持が給されることとなった。御用金の総額は不明ながら、寛延元年12月21日の「覚」によれば、495両の貸し付けが確認できる。3代目当主孫左衛門は寛保2年(1742)に生まれた。父嘉助が死去した宝暦6年(1756)はわずか15歳であったが、藩より30人扶持が給付されることとなった。同11年に町年寄に就任。寛政4年(1792)までの間、30年以上町年寄を勤めた。その間、息子の4代目嘉右衛門知義も寛政3年から町年寄を勤めており、親子で城下町の差配を行なう時期があった。享和2年(1802)には初代孫左衛門以来の

出精が評価されて給人格御勝手御用役に取り立てられた。4代目当主嘉右衛門は寛政3年(1791)3月22日に町年寄に就任、享和3年(1803)に父孫左衛門が死去すると家督を相続し、藩からは30人扶持が与えられ、父同様給人格御勝手御用役に取り立てられた。松代藩の商品流通にも大きく関わり文化13年(1816)には産物御用掛、翌14年には川船運送方御用、文政7年(1825)には社倉調役、同9年には糸会所取締役、天保4年(1833)には産物会所取締役を務めている。その後、5代目当主嘉助、6代目当主慎蔵も産物会所に関与し、明治維新を迎えている。明治2年(1869)に松代商法社が設立すると、慎蔵は商法掌に任命され、その後、慎蔵は士族に列し、明治12年(1879)には第六十三銀行(明治11年設立。昭和6年に第十九銀行と合併し、現在の第八十二銀行に至る)頭取に就任した。

では、八田家はどのような蔵書を持っていたのであろうか。八田家文書の中には易学や茶道、風説書の類がわずかに遺されている程度であり、あまり多くの書籍が遺されていない。一方で、八田家文書の中には蔵書目録が5点遺されており、そのうち整理番号あ1152は「書籍目録」と表紙に記され、裏表紙には「文化十歳次癸酉七月十有六日改之 八田姓」と記されている。裏表紙に記された文化10年(1813)とは、4代目当主嘉右衛門の時代である。松代藩は文化年間(1804～1818年)にたびたび御用金が課しており、まさにこの年文化10年、嘉右衛門は藩主・真田家の信仰が篤い白鳥宮の普請のため100両を献上している。これらの功績が認められ、同年10月には「年来御用向出精心懸宜相勤」との理由で5人扶持が加増された。この5人扶持を義弟喜兵衛に与えて分家が認められているが、「書籍目録」が作成されたのはこのような時期であった。

さて、「書籍目録」は墨付16丁で、天・地・玄・黄・宇・宙・荒・洪・月の項目ごとに書物が記されている。天・地・玄・黄…と言えば、中国・梁の文人である周興嗣が作成した「千字文」で、4文字で1句を構成し、異なった漢字を用いた韻文である。それぞれを見てみると易学関係の書物を収めた項目(玄)、俳諧関係を収めた項目(宇)などの特徴は認

められるものの、ほとんど項目は様々なジャンルが混在しており、この分類は書物を収納した箱ないし書棚に付された分類記号であるものと思われる。ここでは紙幅の都合上、冒頭の「天」の項目に関してのみ一部紹介してみたい。

「天」には17種107冊の書物が記されている。そのすべてを記せば、「孝経大全」(10冊)、「碧巖集」(5冊「碧巖録」のことか)、「合類大節用集」(13冊)、「孫子国字解」(10冊)、「李滄濱尺牘」(3冊)、「同尺牘」(1冊)、「古文真宝」(2冊)、「新訓蒙求」(3冊)、「風俗文選」(9冊)、「小学句読」(4冊)、「古文孝経標註」(1冊)、「武経七書俚諺鈔」(30冊)、「海国兵談」(6冊)、「楠家伝」(7冊)、「謙信軍記」(1冊)、「兵庫記」(1冊)、「大阿記」(1冊)である。「天」の前半は中国の古典の注釈、後半は軍記物が多いのに気付くが、興味深いのは「海国兵談」であろう。

「海国兵談」は「寛政の三奇人」と評された林子平が執筆した書物で、寛政3年(1791)に仙台において出版されたものの、内容が外国の侵略に備えた海防論であったため、発禁・版木没収となっている。なぜ、八田家がこの書物を持ち得たのか、詳細は不明だが、文政年間(1818～1830年)に至って松代藩は真田幸貫が当主となり(偶然にも林子平を罰した寛政の改革の主導者である松平定信の息子である)、佐久間象山を登用して開明的な政策を実施していく。真田幸貫は天保の改革期に外様大名としては異例の老中に就任し、海防などの政策を率先して進めていくが、松代の地には真田幸貫や佐久間象山のような眼差しをもった人物が彼らの登場以前にも存在していたことを「書籍目録」は物語っている。

なお、八田家文書の中には幕府・朝廷・諸外国の状況などを記した文書も多く遺されている。例えば整理番号え860には嘉永6年(1853)夷敵退治論旨の写しなどもある。豪農や豪商のネットワークやそれに伴う情報の流布などについて多くの研究で明らかにされているところだが、八田家の場合もまさに様々な情報を享受していたことがうかがえる。今後、松代藩専売制を推進した八田家の文化ネットワークの具体相を明らかにしつつ、政治的経済的動向との関わりなどを考えていきたい。

明恵の和歌・夢・画——真贋のあわい

第5回日本古典文学学術賞受賞者 平野 多恵（十文字学園女子大学短期大学部准教授）

明恵の和歌と夢を研究テーマに選んだのは、大学の卒業論文を書くときだった。以来、明恵の研究を続けて18年になる。その間に、さまざまな出会いがあった。

明恵に興味を持った人が最初に手に取る基本書の一つに、岩波文庫の『明恵上人集』がある。『明恵上人歌集』『明恵上人夢記』『梅尾明恵上人伝記』を収め、この一冊で明恵の和歌と夢と人生を概観することができる。その校注を担当された久保田淳先生から、ある人の所蔵する明恵筆の掛け軸の真贋を鑑定してもらいたいとの依頼があった。2005年の春、依頼の手紙とともにその軸の写真（図1）が送られてきた。



図1 「明恵上人自画賛」
（山内恭彦氏・鈴木皇氏旧蔵
本紙 縦65.5cm、横20.6cm）

和歌一首に口の広い花器の画が添えられ、その下に明恵の法名「高弁」の署名がある。

いとはずは何と

うきよの山ざくら

折いれて見よもの>

こゝろを

下句の「折いれて見よもの>こゝろを」は、心を重視する華厳僧であった明恵らしい表現に思えるが、筆跡は真筆に比べてメリハリがない印象を受けた。とはいえ、印象では判断できないため、明恵の自筆から同じ文字を探して比較することにした。

平仮名で書かれた明恵の自筆和歌は、「明恵上人墨消和歌」「高弁和歌草稿」（いずれも高山寺蔵）がよく

知られるが、現存するものは少ない。そこで、上記の仮名の和歌草稿と合わせて、自筆の仮名消息二点（上蓮房宛、井上尼宛）と高山寺と陽明文庫所蔵の夢記を参照した。

結果的に、依頼の詠草は明恵の真筆ではないことが明

らかになった。そのように判断したのは、以下の三点による。①真筆に比べて筆致に勢いが無い、②「何」や「折」などの漢字のくずし方が真筆と異なる、③当該詠草で用いられている仮名の字母（「須(す)」「半(は)」「農(の)」「帝(て)」「路(ろ)）などが明恵自筆に見られない字体であるという三点である。

上記の所見を報告したところ、しばらくして、掛け軸の御所蔵者である鈴木皇氏から丁寧な礼状が届き、鑑定の御礼に件の掛け軸をくださるとのお申し出をいただいた。真贋を検討しただけで、面識もない駆け出しの研究者が貴重な御所蔵品を頂戴してよいものだろうか。礼状を何度も読み返して一週間ほど逡巡したが、明恵研究に役立てば本望という有り難いご厚意である。思い切ってお言葉に甘えることにした。

御所蔵者の鈴木皇氏に初めてお目に掛かったのは、掛け軸を頂戴したときである。鈴木氏が大切に持ってこられた鼠色の風呂敷包みから「明恵上人自画賛」と箱書のある桐箱が姿をあらわした。明恵自筆として重んじられてきたものであることが一目で分かった。

鈴木氏は原子物理学の研究者として活躍された方である。東京大学教養学部で助教授として教鞭をとられた後、大学時代の恩師に請われて上智大学の理工学部に移り、そこで長く研究を続けられた。伝明恵筆の軸は、恩師の形見分けとして1986年に譲り受けたものという。

その恩師とは、東京大学名誉教授の山内恭彦氏。原子物理学の権威として知られ、湯川秀樹・朝永振一郎両ノーベル賞学者の少少年長で、両者から畏敬されていたという。東大では、鈴木皇氏をはじめ、有馬朗人氏、小柴昌俊氏など、優秀な研究者を多く育てたことでも知られる。東大に奉職の後、上智大に新設された理工学部へ移り、物理学の研究と教育に多大な貢献をされた。

山内家は代々小田原藩士の家系だが、江戸居住だったらしい。山内家の墓が巣鴨の染井霊園に現存する。伝明恵筆の軸が山内家に伝来した経緯は残念ながら不明である。山内氏は専門の物理学の他、フランス文学や漢籍、仏教に造詣が深かったという。その父君は画に長じ、冷泉家の子弟に墨絵を教えていたというから、伝明恵の掛け軸が

入手しやすい環境にあったのであろう。

山内氏・鈴木氏旧蔵の掛け軸は明恵の真筆ではないが、荒唐無稽な偽作でもないことが、研究を進めるうちにわかってきた。当該詠草の「折いれて見よものゝころを」と酷似する下句を持つ、画付きの明恵詠が、他に二点存在するのである。

一つは、『内田家某家所蔵品入札目録』（昭和7年10月31日、東京美術倶楽部）所載の「明恵上人 花生自画讃」（図2）である。先の掛け軸と同様、和歌の下に花器の画が描かれる他、和歌の前には詞書がある。

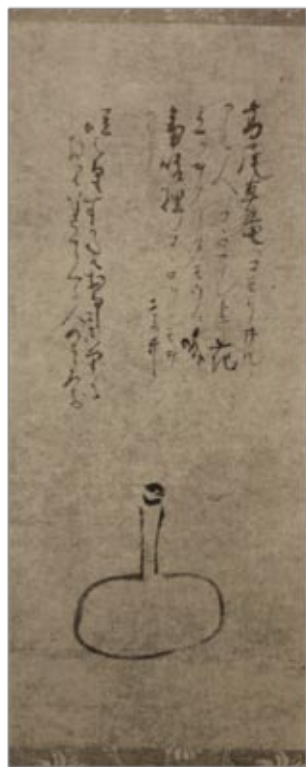


図2 「明恵上人 花生自画讃」（『内田家某家所蔵品入札目録』より転載）

高尾草庵ニコモリキルニ、
アル人ノコ、ロザシトテ、
花立ヲヲクリタモウニ、仮
事喩理ノコ、ロヲ、モキ遣
リテ 高弁
咲はなもすがたもおなじこ
とはりと おりいれてみよ
人のころお

詞書から詠歌事情が知られる。明恵が高尾の草庵に籠もっていたとき、ある人から花立てを贈られ、それを見て「仮事喩理」の心を感じやって詠んだものである。「仮事喩理」の典拠は未詳だが、仏典に拠る表現だろう。和歌の第五句が「ものゝころ」ではなく、「人のころ」である点は異なるが、そ

れ以外の下句は鈴木氏旧蔵の掛け軸と共通する。

「花生自画讃」の筆跡は明恵真筆に比較的近い。さらに、詞書の冒頭「高尾草庵ニコモリキルニ」は、明恵自撰の『遣心和歌集』（『明恵上人歌集』所収）詞書に、「高尾ノ草庵ニコモリキアヒダ」（34番歌）、「高尾ノ住房二侍ベルニ」（46番歌）など、類似の表現が見出せる。いかにも明恵の書きそうな詞書だが、明恵自身が当初から軸装に適した形で書いたのかという疑問は残る。

もう一点は、上山勘太郎氏所蔵で、明恵の夢記とされるものである。記載された和歌は「明恵上人 花生自画讃」と同じで、詞書もほぼ共通するが、詞書の末尾に「高弁ころに思ふ夢曰」が加わっている点で、先の詞書とは異なる。「夢曰（夢に曰く）」が和歌の直前に書かれ、夢で和歌を詠んだ体裁である。挿絵には、草花を活けた花器が描かれている。

はたして、これら三点はどのような関係にあるのだろうか。明恵の「夢記」は高山寺の外に出た後、その多くが軸装にされ、茶掛けとして珍重された。絵のあるものは特に好まれたから、上記の夢記仕立ての品は、本来は「夢記」でなかったかもしれない。

明恵の和歌も好まれた。江戸時代には勅撰集所収の明恵詠を集めた『明恵上人御哥集』（兼築信行氏所蔵）が編まれた。版本として刷りを重ねた『梅尾明恵上人伝記』も明恵詠を多く含む。おそらく、鈴木氏旧蔵の伝明恵筆の掛け軸は、明恵を敬愛する時代の中で、前掲の「花生自画讃」や夢記切を参考に作られたのだろう。

2001年から奥田勲先生のご指導を受け、明恵の夢記を解説する研究会を続けている。この会の活動を通して高山寺外にある夢記を追いかけるうち、絵や和歌の入った伝明恵筆の品には、今回の例のように、酷似するものが複数存在することを知った。たとえ贋作であっても、後代の人が明恵をどのようにイメージしたかを伝える資料として価値がある。真贋のあわいに、明恵を慕った人々の存在を感じとることができる。

【参考文献】

- ・奥田正造『明恵上人要集』（1933年）
- ・絶学無憂刊行世話人会編『絶学無憂—山内恭彦先生 遺稿と追悼—』（1990年）
- ・奥田勲「明恵上人夢記山外本目録」（『明恵上人資料 第四』東京大学出版会、1998年）
- ・米田真理子「明恵上人夢記山外本目録続貂」、同「高山寺外所蔵夢記をめぐる二つの考察—書名のある夢記、明恵と長房の周辺」（荒木浩編『心』と〈外部〉—表現・伝承・信仰と明恵『夢記』一）（大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究成果報告書、2002年）
- ・小林あづみ他『明恵上人夢記』目録』（『国文』110号、2008年）

第 36 回国際日本文学研究集会

平成 24 年 11 月 17 日(土)～18 日(日)、第 36 回国際日本文学研究集会が国文学研究資料館において開催されました。二日間に渡る研究集会において、国内外の応募より選出された 12 名の研究発表、6 名のショートセッション発表、5 名のポスターセッション発表の、計 23 名による発表がなされました。二日目の最後には、当館開催中の特別展示「樋口一葉『たけくらべ』自筆原稿展」に合わせ、相模女子大学の戸松泉教授による「『たけくらべ』自筆草稿を開く―樋口一葉<書くこと>の領域―」と題する公開講演が行われています。

国際日本文学研究集会は、国文学研究資料館の主催によるもので、日本文学研究の国際的な発展を目的とし、昭和 52 年から毎年秋に開催されている長い歴史を有するイベントです。今年のテーマは「再生の文学―日本文学は何を発信できるか―」で、国内外から 115 人の参加者が集まりました。その中には海外及び国内に在住の 10 ヶ国の外国人研究者計 37 人が含まれています。発表者は集会のテーマをめぐってさまざまな角度から研究成果を発表し、質疑応答も活発に行われ、出席者に多くの刺激を与えました。

第 36 回国際日本文学研究集会における研究発表の全文及びショートセッション発表の要旨、ポスターセッションのテーマを収録した会議録は来年 3 月に国文学研究資料館より出版される予定で、会議プログラム及び要旨集(日本語・英語)の PDF 版は、国文学研究資料館の web にて公開されておりますので、御覧いただければ幸いです。

(http://www.nijl.ac.jp/pages/event/symposium/2012/japanese_literature.html)

なお、第 37 回国際日本文学研究集会は平成 25 年 11 月 30 日(土)～12 月 1 日(日)に開催される予定です。若手の研究者や外国人研究者がより参加しやすくするために、第 37 回研究集会の研究発表・ショートセッション発表およびポスターセッション発表の三つのセッションにおいては、とくにテーマを設定しません。また、ポスターセッション発表においては、英語による発表も可能となります。多数のご参加をお待ちしております。平成 25 年 4 月下旬から研究発表を募集しますので、詳しいことは明年 4 月に当館のホームページを御覧いただくよう、お願い申し上げます。(陳 捷)



研究発表



講演



ショートセッション



ポスターセッション

イタリアとの日本文学国際共同研究集会

2012年9月22日(土)～23日(日)にかけて、「日本文学のことばの力」(Il potere delle parole nella letteratura giapponese)と題した共同研究集会をグランドホテル・バリオーニ(フィレンツェ・イタリア)会議室において開催しました。これは、国文研とローマ大学などイタリア4大学との学術交流協定に基づく事業の一環として開催されたもので、日本文学国際共同研究集会の名の下に今回で5回を重ねます。プログラムは下記の通りです。

Gala Maria Follaco (ナポリ東洋学大学)「トラウマのナラトロジー—ことば、そして映像の力」

Luca Capponcelli (カターニア大学)「歌と伝説における言葉の力—土居光知の歌垣発生論から」

Matilde Mastrangelo (ローマ大学)「話芸における言葉の力：口演とテキストの相関」

Bonaventura Ruperti (ヴェネツィア大学)「文句は情をもとすと心得べし—近松門左衛門の浄瑠璃における言葉の力」

山下則子 (国文学研究資料館)「見立」ることばの力—絵本と歌舞伎」

Emanuela Costa (ナポリ東洋学大学)「言葉の境界線を越えるとき—多和田葉子の越境文学」

Luca Milasi (ローマ大学)「墮落した青春の謎を解く言葉の力—三島由紀夫のデカダンス文学批評」

青田寿美 (国文学研究資料館)「りんごのセクシュアリティ—近代日本文学における林檎への眼差し—」

日程をAISTUGIA(伊日研究学会)に連続して設定したことからか多くの参加を得て、Mastrangelo教授、Ruperti教授、鷺山郁子教授(フィレンツェ大学)を司会に活発な討議が行われました。テキストに即した緻密な解釈もあり、また、文学を巡る社会環境と文学との位置関係の問題に関する議論、文学を起点としてひろがる映像芸術や芸能の世界に関する分析など、着実な成果が積み上げられているとの実感を得ることができました。

また、翌24日(月)には、科学研究費基盤研究(A)(課題番号22242010)の主催でフィレンツェ大学を会場に「日本古典籍における【表記情報学】」と題した会議も開催されました。こちらは、当館の今西祐一郎館長の提唱する新たな学問領域としての「表記情報学」の確立を目指す試みの一環として企画されたもので、下記の報告が行われました。

今西祐一郎(国文学研究資料館)「表記情報学—「片仮名本」と「平仮名本」

中村一夫(国土館大学)「仮名文テキストの文字遣—鎌倉から江戸の源氏物語を通覧する」

海野圭介(国文学研究資料館)「二つの方丈記：ひらがな／カタカナのエクリチュールとリベラトゥラ」

伊藤鉄也(国文学研究資料館)「『和泉式部日記』の文字表記」

坂本信道(京都女子大学)「古写本における字母「无」の使用と変遷」

Aldo Tollini(カ・フォスカリ大学ヴェネツィア)「和歌を仮名で書くことについての一考察」

発表の後にはラウンドテーブルが設定され、それぞれの報告が提起した課題を素材に漢字・カタカナ・ひらがな、万葉仮名、ローマ字等々の文字表記の混在というほぼ日本独自の現象の分析と課題化・研究領域の開拓に関する議論が重ねられました。こちらも活発な討議が行われ、議論は欧州における言語分布と表記の問題などにも及びました。

(海野圭介)



「日本文学のことばの力」共同研究集会



日本古典籍における【表記情報学】

EAJRS（日本資料専門家欧州協会）研究集会 2012 ベルリン

9月19日から22日にかけて、EAJRS（日本資料専門家欧州協会）の2012年研究集会がベルリン国立図書館にて開催されました。この研究集会は欧州在住の日本資料関係研究者を中心に毎年開催されていて、日本からも国文学研究資料館の今西祐一郎館長の他、国立国会図書館、国立情報学研究所などに所属する研究者合わせて28名が今大会に参加しました。

「Bridging the gap – Past and Present Japanese Resources in the Digital Age」をテーマに掲げた今大会は、パネルセッション「古典籍の大規模なデジタル画像オンライン化のあと、何が次に必要とされるのか？」で始まりました。Ellis Tinios氏の「江戸期版本オンライン画像データベースの更なる発展に向けた、機関間連携の役割」、赤間亮氏の「和本デジタル化の進捗と古典籍情報の統合・活用手法」のなかで、各所蔵機関による古典籍のデジタル化とそのデータベース公開が進んでいくと今後はそれらのデータベースに対してメタデータの拡充や横断検索の実現など利便性向上が求められていくとの発表がありました。特に赤間氏の発表で紹介された立命館大学アトリーサーチセンターの『ARC 書籍閲覧システム』（<http://www.dh-jac.net/db1/books/search.html>）は、立命館大学内の各機関や国立国会図書館の公開デジタル画像をまとめて検索することが可能で、国文学研究資料館のデータベースについても今後連携を求めていると言及がありました。

欧州在住の研究者に向けた日本国内のデータベース関連の動向として、国立国会図書館からは近代デジタルライブラリーや歴史的音源のデジタル化資料の紹介があり、国立情報学研究所からは CiNii Books の紹介がありました。ハーバード大学のペッツォールド掛軸・巻物コレクションやベルリン国立図書館の『Cross Asia』（<http://crossasia.org>）といった日本国外の日本資料データベースに関する紹介もありました。

データベースの紹介の他、長崎を中心とした日本の海外交流に関するパネルセッション「長崎学」や国際日本文化研究センターの「モニターズ『東インド会社遣日使節紀行』の図版に関する一考察」など、さまざまな研究発表が行われました。特に今回の開催地ドイツに合わせて、Andreas Mettenleiter氏の「German POWs in Japan – materials in the library and archives of the Siebold-Museum Würzburg」、Hartmut Walravens氏の「Oscar Nachod and Japanese Studies」など、近代の日独交流についての研究が数多く発表されました。これらの研究では、第2次世界大戦以前に存在した日本資料の多くがソビエト連邦の占領下で散逸してしまったことが共通の障害となっていました。ワルシャワやブカレストなど東欧地域での日本資料所蔵機関についての発表でも、冷戦時代には日本を含めた西側諸国関係資料の入手や保存に厳しい制限があったと報告があり、旧東側地域で冷戦の影響がいまだに強く残っていることが感じられました。

研究発表以外の日程としてはベルリン国立図書館とベルリン・ダーレムアジア美術館の見学がありました。そして、最終日22日の総会において次回集会の開催地をパリと決定して閉会した後、ベルリン市内の森鷗外記念センターの施設見学で、今回のEAJRS全日程は終了しました。

なお、EAJRSのホームページ（<http://ejrs.net>）から、今大会のプログラムと発表抄録がPDF形式で閲覧又はダウンロードできます。（田中 梓）



ベルリン国立図書館

平成 24 年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会

11月1日(木)に当館大会議室において「古典の日」講演会が行われました。

「古典の日」は、『源氏物語』の成立に関して『紫式部日記』によって文献上確認できる最も古い日時が寛弘五年(1008)11月1日であることから、源氏物語千年紀に当たる平成20年(2008)11月1日に、源氏物語千年紀委員会が全国に向かって「11月1日は古典の日」と宣言したのをきっかけに法制化の機運が高まったものです。その後、源氏物語千年紀委員会が古典の日推進委員会と名称をかえて運動を続け、このたび法制化が実現しました。日本古典文学の文献資料調査と研究を主事業とする当館も、それを記念して講演会を催すことにした次第です。

当日は、今西祐一郎館長の挨拶にはじまり、当館教授の大高洋司氏が「京伝と馬琴—悪女の描き方—」という題で、次いで当館の名誉教授で逸翁美術館館長の伊井春樹氏が『源氏物語』の場面についてという題でお話しをされました。

会場は150人を越す聴衆の熱気に包まれ、新収の「源氏物語図屏風」も陳列されて、「古典の日」にふさわしい一日となりました。当館では次年度以降も「古典の日」にちなんで、講演会を開催していく予定です。(小林健二)



『源氏物語』の場面について」を講演される伊井春樹氏

平成 24 年度 サテライト講座

12月8日(土)、神田にてサテライト講座「近代文学」を実施しました。

まず青田寿美氏(当館准教授)が「書脈」を追う—典籍に残された印(しるし)と証(あかし)」という題で話されました。蒐書家から蒐書家へと典籍が渡ってきた知的連鎖は、蔵書印によって追うことができると、「書脈」をありありとつなげて見せてくれました。とりわけ、忍頂寺務の蔵書だった書籍に残されている印の軌跡を例にとられ、書籍に生きた脈を与えられました。取り上げられた印主は正岡子規、鈴木馨、岡野知十、末松謙澄、清原弘賢、森鷗外など、30以上にも及びます。相似した印の間には何らかの連関があるのではないかという問題提起もなされました。

谷川恵一氏(当館副館長)は「明治の時間・明治の文学」という題で話されました。明治の改暦以降、細かな時間の刻みを表すことのできる西洋の時間が急速に普及したとのこと。チャールズ・ディケンズ『クリスマス・キャロル』の翻訳を9つも並べられ、日本の読者にも西洋の分や秒の単位が浸透していたありさまを示されました。つづいて二葉亭四迷『其面影』が分析されました。時間を用いて重要な場面を築いた最初の近代文学という位置付けです。おおまかな時間を目安とする家の内側の時間と、鉄道や学校など細かな定刻のある家の外側の時間とが対比的に取り出され、明治文学の新しい試みが明らかになりました。

会場は43名の熱心な聴講者で埋まり、多くの質問が寄せられました。都心で当館の研究に触れていただく本講座はこれで近代文学まで終えたこととなります。(野網摩利子)



講座風景

連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」

今西館長自身の発案により、当館初めての試みとして連続講座を開催しました。題名のとおり、『源氏物語』の江戸時代の版本をテキストとし、その一部をくずし字で読むというものです。講座の性格上、5回すべてに参加出来ることを条件に募集をしましたが、30人の定員に対して、164人もの申し込みがあり、開催する前からこの講座に対する関心の高さがうかがえました。

くずし字の歴史や字母のこと、あるいは『源氏物語』の内容などを簡単に説明しながら、実際に文字を一字一字丁寧に読み進めていきました。くずし字は初めて読むという方もいらっしゃいましたし、一方では館長と一緒に小さく声を出しながら読んでいらっしゃるような慣れた方もおられました。いずれの方にも満足していただいたようで、むしろ時間が短すぎるとの声もあったほどです。

参加の皆さんには大変好評で、5回連続にもかかわらず欠席される方もほとんどなく、熱心に受講していただきました。また、このような講座の開催を強く望まれる方々も多くおられるようです。本年度は初めての試みということもあり、少ない定員での開催となりましたが、受講人数のことなどを含めて、来年度以降の開催につき前向きに検討していきたいと考えております。(入口敦志)

開催期間：平成24年10月2日、9日、16日、23日、30日。5回

講師：今西祐一郎館長

テキスト：『源氏物語』承応三年、八尾勘兵衛刊。54冊。絵入本。請求記号、サ4-26。尚、この資料は全冊のカラーデジタル画像を当館ホームページにて公開しており、どなたでも御覧になれます。

開催場所：オリエンテーション室



連続講座風景

人間文化研究機構連携展示「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産—」

2011年3月11日の東日本大震災に伴う巨大地震と大津波の被害、さらには福島第一原発の事故により、被災者の方々は、現在でも仮設住宅や避難先での生活を余儀なくされています。こうした状況のもと、被災地では、例年以上に祭りや芸能の奉納が活発に行われたといえます。地域コミュニティの存続が危ぶまれるなか、人間の「生」や地域の結びつきに関わる有形・無形の文化遺産の価値を改めて認識させられた出来事でした。

国文学研究資料館をはじめ、人間文化研究機構に属する諸機関では、こうした文化遺産を守るべく、震災直後から積極的な復興支援活動を行ってきました。被災地の人々が祖先から受け継ぎ、誇りとしている文化遺産の存在が、地域の生活復興の糧となることを信じての取り組みでした。

この連携展示は、これらの復興作業を紹介して、かけがえのない文化遺産の意義を見直し、震災・津波の記憶をいかに未来に継承し、次代の社会を築き上げていくのかを考える契機にしたいとの目的で企画されました。なお、当館での展示では、「文書で継承された記憶」として、館蔵資料の中から、嘉永7年(1854)の東海地震で被災した伊豆国内浦地域の古文書、弘化4年(1847)の善光寺地震や明治の三陸津波被災者への義援金に関する信州松代真田家の記録、大正12年(1923)の関東大震災の様子を記録した写真なども紹介します。

会期中の3月8日(金)には、「国文学研究資料館 災害連携研究報告会」(午後1時～4時、国文学研究資料館大会議室)の開催も予定されています。

皆さまのご観覧をお待ちしております。(太田尚宏)

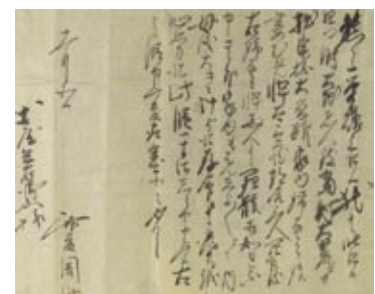
開催期間：平成25年1月30日(水)～3月15日(金)

開催時間：午前10時～午後4時30分 ※入室は午後4時まで

休室日：日曜日・月曜日・祝日

入場料：無料

開催場所：国文学研究資料館1階展示室



嘉永7年東海地震の被害を伝える書簡

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

■入試説明会と特別講義

日本文学研究専攻は、10月20日(土)に、平成25年度の入学試験についての説明会を行いました。本年は6人の参加者で、日本文学研究専攻や入試に関する説明の後、施設案内として院生室や院生図書室、講義室等の総研大専用部分や国文図書庫の見学の後、研究展示「江戸の「表現」—浮世絵・文学・芸能—」を見たり、在校生との懇談を行ったりしました。また、神作研一准教授による「江戸のおんなうた」は、研究者としての心構えや近世和歌研究の基礎知識をも含めた、江戸時代女流歌人に関する特別講義でした。



入試説明会

■総研大フォーラム

10月21日(日)、22日(月)、国立歴史民俗博物館において開催された学術交流フォーラムは、総研大文化科学研究科連携事業の1つで、学生が中心になって行う研究成果公開発表会です。今回は口頭発表に林真人氏「慶安本『とうだいき』に見る古浄瑠璃正本の形態の変遷」、ポスター発表に屋代純子氏「山岳小説の〈文化的翻訳〉—ビョルンソン「アルネ」と花袋の翻案小説「山小屋」—」、吉田小百合氏「「今めかし」小考—主に物語作品の種類の継承について—」、教員シンポジウムに落合博志教授が参加し、様々な専攻の教員・学生から活発な意見や質問をいただきました。

■古浄瑠璃『阿弥陀胸割』復曲公演観劇記

林真人(総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究専攻博士後期課程)

慶長19年(1614)の上演記録が残る『阿弥陀胸割』は、人形操りによる浄瑠璃創成期の作品の一つです。両親を亡くした娘がその供養と弟の未来のために自らの生き肝を売るという物語は、太平の世を迎えた人々に広く受け入れられ、浄瑠璃のみならず説経によっても演じられ、数種の正本も刊行されました。

このたび上越教育大学主催の下、西橋八郎兵衛氏率いる猿八座によって『阿弥陀胸割』が復曲されました。猿八座にとっては一昨年の『弘知法印御伝記』につづく復曲事業です。さる11月4日、武井協三名誉教授と、ゼミで本作品を臨読していた小林健二教授、糸汐里氏(当館特別共同利用研究員)、林の四人は新潟県上越市にある高田世界館という古雅な映画館にてこれを観劇しました。

西橋氏と猿八座の太夫・渡部八太夫氏らが今回の復曲に際して用いたのは、当館所蔵の古活字本『阿弥陀胸割』でした。この古活字本は慶長・元和頃に刊行されたものと考えられている最古の伝本であり、人形操りと結び付いたばかりの時代の浄瑠璃の在り様を知る上で大変貴重な資料です。

西橋氏はこの本文を用いるに際して、様々な創意工夫を凝らしました。たとえば、場面転換が頻繁すぎて通常の舞台装置では対応しきれない劇冒頭部では、僧形の人形が狂言回しとなり、絵解きの趣向で物語を進行させました。また、他の伝本に比して冗長な主人公・天寿の美しさを様々に形容していく場面では天寿を踊らせるなど、随所で人形に動きをつけていきました。このように古活字本は、人形遣いが積極的に工夫を凝らさないかぎり、人形芝居として成立させるのが難しい本文なのです。このような西橋氏の苦労は、はじめに語りありきの作品を人形芝居と結び付けていった慶長期の人形遣いと共通のものなのかもしれません。

今回の復曲公演によって、最初期の人形浄瑠璃が抱えていた課題を垣間見ることができました。古浄瑠璃の読み物化を研究テーマとしている私にとって、絵入りの草子本を用いて試みられた今回の復曲事業は大変刺激的なものでした。関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



クライマックスシーンで天寿の身代わりとなり胸から血を流す阿弥陀像

2月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

3月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

4月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

- 開館 9:30～18:00 ● 請求受付 9:30～12:00,13:00～17:00 ● 複写受付 9:30～16:00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館 9:30～17:00 ● 請求受付 9:30～12:00,13:00～16:00 ● 複写受付 9:30～15:00

表紙絵資料紹介

日本総図

(当館蔵 請求番号 30M-1)

261cm×240cmの国別に色分けされた大型絵図。諸国の城を黒で囲み、江戸・大坂・京都の三都を金色で着色して、北は蝦夷地、南は屋久島や種子島、西側に「朝鮮」「釜山海」を描いている。明暦3年(1657)の大火によって焼失した正保年間(1644～1648年)幕府撰日本図の写しと言われ、近年、当館蔵「日本総図」は寛文9年(1669)以降の写しであり、同じ種類の日本図が大阪府立中之島図書館などに所蔵されていることが明らかにされている。顔料や継紙の剥離が目立ったが、現在は修復が成されている。(西村慎太郎)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成25年(2013)1月21日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷 株式会社アズディップ

©人間文化研究機構国文学研究資料館



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。